

# 初夏の不思議

小川未明

青空文庫



百姓のおじいさんは、今年ばかりは、精を出して、夏のはじめに、早くいいすいかを町へ出したと思います。

おじいさんは、肥料をやったり、つるをのぼしたりして、毎日のように、圃へ出ては、「どうかいいすいかがなりますように。」と、心の中で、太陽に祈りました。そのかいがあつて、いいすいかがなりました。おじいさんは、ある朝そのすいかを車にのせて町の八百屋へ持つてゆきました。

「まあ、みごとにすいかですね。」と、それを見た、八百屋の主人もおかみさんも、びつくりしました。

「今年は、丹精のかがあつて、いいやつがなりました。」と、おじいさんは、ほくほくしました。

「それに、いつもよりか、早うございましたね。」と、八百屋の主人がいました。

「お日さまの照りあんばいが、ばかによくございましたもので、こんなにいいやつがなりました。」と、おじいさんは、喜んで、自分の作ったすいかをながめながら、たばこをぱくぱくとすつていました。

「そうですとも、なかなかの丹精じやありません。」と、八百屋の主人もおかみさんも、おじいさんに同情をしないものはありませんでした。

おじいさんは、すいかを八百屋に卸して、自分はまた静かな平和な村に空車を引いて帰ってゆきました。これから、つぎつぎと生長する圃の野菜物に手をいれてやらなければなりません。それで、おじいさんは、なかなか暇というものがありませんでした。八百屋の主人は、小僧を呼びました。

「このすいかをかついで出て、売ってこい。」といたしました。

すこし値は高いが、はしりではあり、こんなにいいのだから、売れないことはない、主人は考えました。

「もう、半月もたちや、すいかだつて珍しくはない。いまなら値が張つても売れるだろう。」と、主人は、つけくわえていいました。

小僧は、遠方から、この店に雇われてきていました。正直な少年であります。だが、生まれつきものをいうときに、どもる癖がありました。そして、急ぎ込めばますますどもるのであります。だから、小僧がものをいう時分には、耳たぶが赤くなって、平生でさえ、なんとなく、そのようすがあわれに見られたのであります。

小僧は、主人にいつかつて、両方のかごに幾つかのすいかを分けていれました。それをかついで、町の中を売つて歩きました。また、さびしい屋敷町の方へと、はいつていったのであります。

ある家の前へきましたときに、女が呼び止めました。家の中から、もうそんなに若くはない、年をとつた女が出てきて、

「どれ、すいかを見せておくれ。」といいました。

小僧は、肩からかごをおろしました。

女は、かごの中をのぞいて、いろいろすいかを取つて見ていましたが、そのうちに、一つ一つ、値をききはじめました。小僧は、どもりながら、その値をば答えました。

「なんて、高いすいかだろう。」と、女は、びつくりしたように、大きな声でいいました。

「お、奥さん、まだすいかは、はしりですから、た、高いのでございます。」と、小僧は、どもりながら答えました。

女は、小僧のいうことを鼻さきで、嘲笑うようなようすをして、

「だつて、もう、半月もたてば、その値の半分だつてしないよ。だれが、そんな高い値でこのすいかを買うもんか。」と、女はいいました。

「奥さん、そういわんで、ど、どうか、買ってください。」

「小僧さん、二十銭までおきよ。おまえが、一日売って歩いたって、売れはしないから。」と、女は、その中で、いちばん大きなすいかを取りあげていました。

「お、奥さん、私は、主人から、その値でなければ、う、売ってきては、いけんといわれしました。」と、小僧は、耳たぶを真つ赤にして、答えました。

「それでは、まからないのかい、じゃ、いらぬよ。」

女は、邪慳にいつて、手に取りあげていたいちばん大きなすいかを投げ出すように、かごの中へ落としました。あまり、手荒であつたため、大きなすいかは、下のすいかにぶつかつて傷がつきました。

小僧はびつくりいたしました。

「お、奥さん、こんなに傷がついてしまいました。傷物になつては、主人にいつかつた値では、どこへいつたつて売れません。ど、どうかこのすいかを買ってください。」と、顔を赤くして、頼みました。

「なに、私が、そんなことを知つたものかね、私は、下に置いたばかりなのだよ。」と、女は、邪慳にいつて、相手にしませんでした。

この有り様をだれも見ていたものはありません。ただ、太陽だけが、空から、ながめていました。小僧は、途方にくれて、目に、いつばい涙をためていました。

ちようど、このとき、あちらから、かすんだ往来をまだ若い薬売りがやってきました。二、三年前まで、おじいさんが、薬を売りにやってきたのでしたが、このごろは隠居でもしたのか、まだ若い男が、旅から、わざわざこの村の方までやってきて、薬を売るのでありました。

「先祖代々の家伝、いつさいの妙薬。」と行って、歩いてきました。

やがて、若い薬売りは、箱を負つて、すがさを目深にかぶつて、草鞋をはいて、こちらにきかかりますと、女と子供が、なにかたがいにいいあつていようすでありましたから思わず歩みをとめました。

「薬屋さん、いつさいの妙薬なら、このすいかの傷がなおされるだろう。」と、女は、あざ笑つていいました。

若い薬売りは、いつたい何事が起こつたのだらうと思つて、にわかには返事ができませんでした。すると、小僧は、どもりながら、今日のことをいつさい語つて聞かせたのです。

この話を聞いた薬売りは、静かに顔をあげて、

「奥さん、それは、あなたのほうが無理です。」といいました。

女は、たいそう怒りました。

「なにが無理か。おまえこそいいかげんなうそをいって、人をごまかそうと思っているじゃないか。いつさいの妙薬なら、このすいかの傷をなおしてごらん。」といいました。

若い薬売りは、しばらく黙っていました。

「奥さん、なおしてみせます。」といつて、脊に負っている箱をおろしました。そして、中から金色の薬をとり出して、その薬を水で溶かして、すいかの傷口に塗りました。太陽の暖かな光のために、薬は流れて、大きなすいかを金色に染めてしまいました。

小僧は、あつげにとられて見ていました。すると、不思議にすいかの傷口は、ふさがつてわからなくなつてしまつたのです。

女は、これを見て、言葉が出なく、ただぼんやりしていました。

「このすいかを食べた人は長生きします。今晚、このすいかを夜店に持つて出ると、きつと値がよく売れますよ。」と、薬売りはいいました。そして、若い薬売りは、あちらにいつてしまいました。



薬売りも八百屋の小僧もいなくなつてから、女は、ほんとうに不思議なことがあるものだと考えました。

「あの薬売りは、いつもくる薬売りと顔がちがつていたようだ。今日の薬売りは、神さまか仏さまにちがいない。それでなくて、どうして、あのすいかの傷がおつたらう。たしかに、私の目には、傷口がふさがつたように思われた。」と、ひとり女はつぶやきました。

それから、女は、薬を塗つて、すいかの傷口がなおるものかと、二、三人の人々にたずねますと、みんな大きな口を開けて、

「おまえは、きつねにばかされているのではないか。」といつて笑いました。それで、女はますます驚いてしまいました。

女は、日の暮れるのを待つていました。やがて、晩方になると、町へいつてみました。もう八百屋の小僧が夜店を出していました。そして、ちようど、ひげの白い老人が、その前にうづくまつて、例の金色のすいかを取り上げ、カンテラの火に照らしてながめていました。

女は、この有り様を見ると、そばへ寄つてきて、

「小僧さん、このすいかを私に売ってください。すこし子細がありますから。」といって、  
錢を払って、おじいさんの手から奪うようにして持ってゆきました。

空は、よく晴れて、きれいな星の光が、幾つもの町を照らしていました。

女は、家に帰って、ランプの下で、もう一度よくすいかを見ました。しかし、どうしたことか傷口がわかりませんでした。そのとき、家じゅうのものがみんな出てきて、ランプの下に集まりました。そして、女の話を書きいて、すいかをめいめいが手にとってながめて、不思議がりました。

「このすいかを切ってみなさい。」と、おばあさんがいわれました。

女の亭主も、おじいさんも、叔母さんも、それがいいといったので、女は、さつそく  
庖丁を持ってきて、真つ二つにすいかを切ってみました。すると、その中は、真つ赤  
であったばかりでなく、血がだくだくと切り口から流れたのです。

女は、驚いて、目を見はりました。

「このすいかは、生きていたのだ。」と、おばあさんがいわれました。

「あまり、おまえが邪慳だから、見せしめのために、神さまがこうしてお見せになったのだ。」と、おじいさんはいわれました。

円まるい、みずみずしい月つきが、ちようど窓まどからのぞいていました。それから、女おんなは、やさしい、いい人ひとになったということがあります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年6月

※表題は底本では、「初夏《しよか》の不思議《ふしぎ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 初夏の不思議

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>